

# ヘリティジ景観の復原に働く歴史意識

— 愛知県江南市の生駒屋敷を事例に —

大 平 晃 久

## I 問題の所在

### (1) ヘリティジの景観

ヘリティジ（歴史遺産）の景観は、過去を伝える場所として、われわれ現在に生きる者に何かを語りかける。そして、学問的な研究対象であると同時に、観光やまちづくりの資源として重要な意味をもつ。しかしその一方で、過去ないしは伝統を、社会的に構築（構成、創出）されたものとしてとらえる見方が、今日では一般化している。そうした視点に立つなら、「過去は現出する現在の視点から、絶えず再創造され、再定式化されて、異なる過去になる」<sup>(1)</sup>。すなわち、ヘリティジは現在において再創造され続けているのであり、「現在における過去のポリティクス」<sup>(2)</sup>が問われなければならない。こうした見方の背景には、「伝統の創造」論<sup>(3)</sup>や、社会構築主義、『記憶の場』プロジェクト<sup>(4)</sup>に代表される記憶への関心の高まりといった、連続する流れがある。本稿が生駒屋敷という決して著名とはいえない事例から、ヘリティジの景観を解釈・復原する歴史意識を問おうとするのは、こうした問題意識による。

ヘリティジ景観の解釈や復原に絞って既往研究を検討すると、ネイションと直結したヘリティジを取り上げた研究が目立つ<sup>(5)</sup>。その一方で、本稿がそうであるように、よりローカルなヘリティジを扱ったものも多い。例えば、福田珠己<sup>(6)</sup>は竹富島の赤瓦の景観の創造を示し、森 正人<sup>(7)</sup>は弘法大師ゆかりの聖地が観光の文脈の中で（再）発見・整備され意味を獲得していった過程を明らかにした。矢野敬一<sup>(8)</sup>は、新潟県の大川城が名所投票と平行してヘリティジとして整序されたことを示している。海外の研究で類似の視点をとるものとしては、ジョンソン, N.<sup>(9)</sup>と、マケイブ, S.<sup>(10)</sup>によるものをあげておきたい。いずれも、ローカルなヘリティジの景観を事例として丹念な分析を行ない、その先にみいだされるネイションとのつながりも説得力をもって示すものである<sup>(11)</sup>。

### (2) 尾張藩在所屋敷としての生駒屋敷

生駒屋敷（小折城）は、尾張藩士であった生駒家の、近世を通しての在所屋敷である。生駒家は、中世以来一貫して尾張国丹羽郡小折（現、愛知県江南市小折）に土着した領主で、織田、豊臣への臣従をへて尾張藩に付属した。尾張藩では、生駒家のように、松平忠吉が清洲に移封された際に家臣団に加えられた家を尾張衆と呼ぶ。生駒家は当初2千石、加増を重ね後には4千石を給された重臣であった。

尾張藩では幕末まで大身の一部藩士に対して給地が行なわれ、給地に在所屋敷を構える例があった。これらの藩士は江戸中期で26家を数え、通常は名古屋城下の屋敷（生駒家の場合は上・中・下屋敷を拝領していた）に居住していた。在所屋敷は下屋敷あるいは隠居屋敷としての役割をもっていたほか、一部は、尾張藩にとっての軍事的要衝を押さえ、給地を支配する政庁としての機能を有し、家臣団の屋敷地を付属させたものもあった<sup>(12)</sup>。

後述の「生駒屋敷絵図」によると、生駒屋敷は東西約185m、南北約300mで、4つの曲輪で構成されている。さらに屋敷に隣接して六斎市免許の街村が連なり、総構えの存在も指摘されるなど<sup>(13)</sup>、小城下町と呼ぶべき景観を備えていた<sup>(14)</sup>。小城下町、あるいは陣屋<sup>(15)</sup>としても注目に値する存在であるといえる。なお、生駒屋敷は小牧・長久手の戦い（1584年）に際して改修を受けたと考えられており<sup>(16)</sup>、本稿もそれに従っておく。

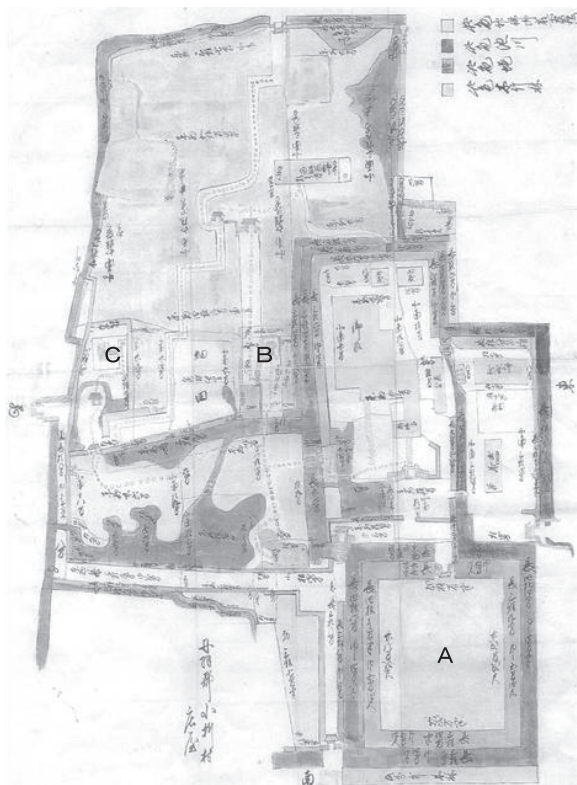
以下では、まず、絵図を用いた生駒屋敷の景観復原を行う（Ⅱ）。従来、生駒屋敷については、屋敷曲輪群の正確な範囲すら複数の案が並立し明確になっていない。従来の復原案、とりわけ定説的な地位にある江南市案を批判的に検討してゆく。次いで、江南市案の復原をより詳細に検討することで、復原の背後にある歴史意識を探る（Ⅲ）。復原の意図、『武功夜話』という物語の影響などについて検討する。そして、歴史意識がヘリティジの復原に影響を与えていることを示す。

## II 生駒屋敷の景観復原

### (1) 「生駒屋敷絵図」

生駒屋敷の景観を復原するに当たってもっとも重要な史料といえるのが「生駒屋敷絵図」(第1図)である。この絵図は現在も生駒家の所蔵で、大きさは86cm×62cm、『江南市史 近世村絵図編』<sup>(17)</sup>にA1版の複製が掲載されているほか、各所に掲載されている。絵図には「丹羽郡小折村庄屋」と記されるだけで、村役人の名前や、作成年代の手がかりになるようなものは記載されていない。この図の成立時期について、『江南市史 資料四 文化編』<sup>(18)</sup>が幕末、『愛知県中世城館跡調査報告Ⅰ』<sup>(19)</sup>が近世後期とする一方で、『江南市史 近世村絵図編 解説書』<sup>(20)</sup>は全く判断を行っていない。

この図に描かれた生駒屋敷は、東西104間余り(約185m)、南北162間余り(約300m)で、周囲を濠に囲まれ、城郭然としている。「御家」や「土蔵」のある曲輪を中心に、東には「御釜屋」と「土蔵」のある馬出し的な曲輪、南には全く建物のない「詰の丸」というべき曲輪(A)がある。北西の大きな曲輪には「御風呂場」などの建物のほか、3か所の祠状のもの(「神佛御廟所家櫓門」と、「イナリ」や「観音堂」、また「田」、



第1図 「生駒屋敷絵図」

出所：愛知県教育委員会編『愛知県中世城館跡調査報告Ⅰ』愛知県教育委員会，1991，283頁。

A～Cについては本文参照。

「畑」もある。なお、屋敷曲輪群の外部は全く描かれていない。

従来はこの絵図の紹介では、この図に朱色の加筆と3か所の貼り紙があることが、なぜか看過されてきた<sup>(21)</sup>。朱の加筆は、曲輪や濠、池を分割するようになされているが、これらは明治期の地籍図(1884年、1888年)とは合致しない。溝や土塁の幅・長さや、地割の各辺の長さの記載が墨色で行われているが、これは朱の加筆に対応しており、朱と同時に加筆が行われたと判断できる<sup>(22)</sup>。貼り紙は「イナリ」・「マイデン」2か所と、「観音堂」を隠すように、上述の加筆の上から貼られている。「イナリ」・「マイデン」、「観音堂」のいずれも1884年の地籍図にみられないことから、朱色の加筆が行われたのは少なくともそれよりも前ということになる。生駒屋敷は明治初期に火災で焼失したと伝えられているため、朱の加筆は明治のごく初期、屋敷がまだ存在した時期に行なわれたと判断できる。

絵図そのものの成立年代については、1694(元禄7)年に没した生駒利勝の墓所とみられる「神佛御廟所家櫓門」が描かれていることしか決め手がない。ただし、ここに描かれた屋敷がたいへん整った状態であることは、作成時期がさほど新しくないことを示しているというべきであろう<sup>(23)</sup>。

### (2) 復原案とその評価

絵図に示された曲輪の大きさをもとに、地籍図(特に、1888年のもの)との整合を図ることによって、第2図中に示したような屋敷曲輪群の外郭線を復原した。この復原図は、小折村を描いたものとして知られている2種類の村絵図<sup>(24)</sup>とも矛盾しないものである。さらには、北辺や北西部の一部では現地でも数10cm程度の段差が連続して観察されることも傍証として指摘できる。

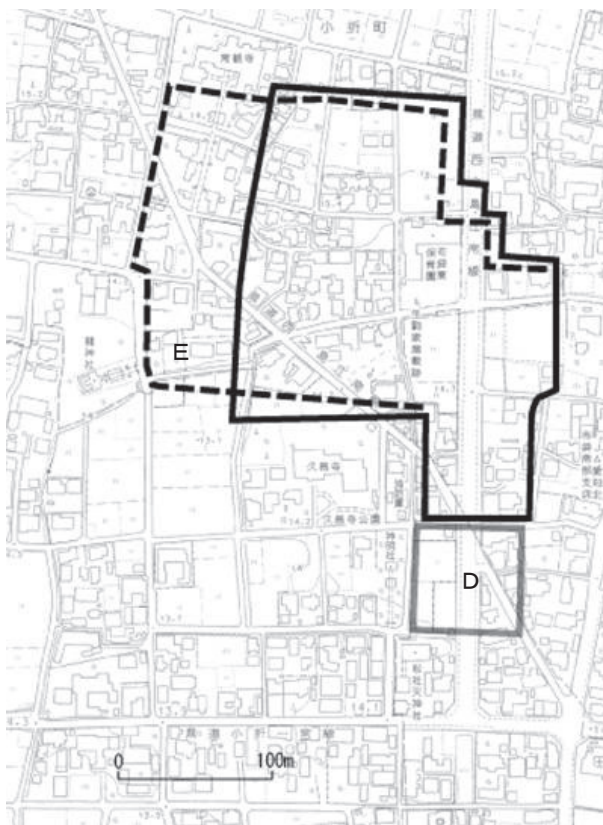
従来、この生駒屋敷の曲輪群については、次に掲げる文献などで何種類かの復原案が提示されてきた。以下ではそれらを検討し、筆者の復原との異同を指摘しておく。

- a. 江南市『江南市史 資料四 文化編』江南市，1983，100頁。
- b. 江南郷土史研究会(瀧 喜義)「生駒屋敷絵図」江南郷土史研究会会報151，1991，1-10頁<sup>(25)</sup>。
- c. 下村信博「生駒屋敷」(愛知県教育委員会編『愛知県中世城館跡調査報告Ⅰ』愛知県教育委員会，

1991) 57-59頁。

- d. 江南市教育委員会「生駒屋敷（小折城）」（現地解説板），1992。
- e. 松浦 武「生駒屋敷について」（松浦 武・生駒陸彦編『生駒家戦国史料集 尾張時代の織田信長・信雄父子を支えた一家』1993）105頁。
- f. 高田 徹「小牧・長久手の合戦における城郭—尾張北部を中心に—」中世城郭研究15，2001，38-79頁。

これらの復原案は3グループにまとめることができる。まず、a,b,dは地元江南市における復原案で、以下では「江南市案」と呼ぶことにする。これは、基本的に地元の郷土史家、瀧 喜義による復原であるが、地元江南市における公式の見解、定説の地位にある復原案とみなしてよいだろう。なお、『江南市史』ではきちんとした復原が行われておらず、aは「江南市内の大正時代の町並み」の記述に付けられた図のなかに屋敷曲輪群の輪郭が描かれただけのものである。次に、fはcの見解を受け継ぎ明確化したものであり、c,fを「高田案」と呼ぶことにする。どちらも異なるのがeで、これを「松浦案」と呼ぶ。なお、a,b,d（江南市案）以外は現在の地図上で復原を示さず、絵図と地



第2図 生駒屋敷曲輪群復原の比較

実線が筆者の案、破線が江南市案。D、Eについては本文参照。

籍図（1984年）との対応を指摘するにとどまり、厳密には復原案とはいえない。

まず、a,b,dの江南市案について検討する。第2図中にこの復原案による生駒屋敷曲輪群の外郭線を示した。この復原は、西側の外郭線に屈曲がある点は第1図と合致している。しかし、同図に記された各曲輪の大きさは大きく食い違い、東西にやや長すぎる形になっており、誤りである。

この江南市案については次章でも検討するが、屋敷の復原の手法に絞ってここでも2点ほど問題点を指摘しておきたい。まずは、上でも触れた生駒利勝の墓所である。これは第1図に「神佛廟所家櫓門」として記載があり、地籍図にも墓地として記載されている。また現地にも明治期の地籍図と同じ位置に存在している。しかし、江南市案では、「明治時代、此の地で村瀬健次郎氏が、製糸工場を営んだので、その折、利勝の碑は同氏所有地の現在地に移された」と説明している<sup>(26)</sup>。しかし、墓所は第1図の段階から現在まで同じ位置にあることは明白であり、移転については他の文献などで確認できない。

2つ目に、復原にあたって参照されたという「生駒屋敷惣構絵図」について指摘したい。この図については「吉田喜三郎氏の手になるもの」で、「江南市税務課所蔵」、屋敷の外堀などが「畳半分程の和紙に描かれ」たもので、「今回の調査で最大の収穫は、織田信雄による大修理の生駒城惣構絵図の発見であった」と紹介されている<sup>(27)</sup>。しかし、江南市総務部課税課（「税務課」は現存しない）にこれに該当する絵図は所蔵されていない。おそらくは、同所で所蔵している、土田喜三郎氏らが作成した地籍図（「小折村ノ内 十四番字 郷中全図」、1888年）<sup>(28)</sup>のことを指しているものと思われる。あるいは、地籍図をもとにした復原図のことを指しているのかもしれない<sup>(29)</sup>、いずれにせよ正確な記述ではない。

次に、高田案を検討する。下村は1884年の地籍図において第2図のDに長方形の曲輪が読み取れることを指摘したが、それが第1図のAの曲輪にあたるかどうか明確にはしていない。一方、高田は第2図のDが第1図のAであると明確に述べている。DをAの曲輪に比定することは、曲輪の形や大きさの点から、一見すると妥当である。しかし、そうすると屋敷曲輪群全体の南北が長くなりすぎるなどの点で、明らかに誤りである。

最後に、松浦案をみる。松浦は後述の『武功夜話』研究者として知られる人物である。この復原は、上の



高田案と同様に、1884年の地籍図と第1図を比較したに過ぎない。地籍図上に大まかに屋敷曲輪群の範囲を示すのみで、細部では疑問もあるが、筆者の復原に最も近い案であるといえる。

以上のように、生駒屋敷の復原について、従来定説となっている江南市案には大きな修正が必要であることを指摘しておきたい<sup>(30)</sup>。さらにいえば、絵図の読み誤りや地籍図との対応の失敗といった技術的な問題は、江南市案にも高田案にもある。しかし、江南市案にはより大きな問題点があると考えられる。そのことを次章ではみていく。

### III 歴史意識の構成

#### (1) 『武功夜話』と生駒屋敷

生駒屋敷復原に関する江南市案には、『武功夜話』をはじめとする前野文書の記述が非常に大きな影響を与えていると考えることができる。

前野文書とは、江南市前野町の吉田家で発見されたとされる、前野一族（吉田家はその子孫とされる）の戦国から江戸初期の動向を書き記した文書群のことである。なかでも『武功夜話』と呼ばれる文書は、織田信長、豊臣秀吉と前野家とのかかわりやさまざまな合戦を生き生きと描くものとして注目され、特に1987年にその書下し文が出版されると、多くの歴史小説や一般書がこれを種本として書かれるに至った。また、記述に明らかな近代の用語や地名が出てくることなどを根拠に、前野文書あるいは『武功夜話』を偽書とする見方も広く定着するようになった。本稿はむしろ真偽の判定を目指すものではないが、少なくともアカデミックな場において、『武功夜話』を含む前野文書が良質の史料とみなされることはまずないということを確認しておきたい。

戦国期の生駒屋敷を、『武功夜話』は「居屋敷は広大、土居掘割を巡らし、土倉三棟、木戸嚴重にして木立生繁り、結構なる構え上郡に比なく城地の如し」と記述している<sup>(31)</sup>。そして、この屋敷は『武功夜話』序盤の第一の舞台である。織田信長、豊臣秀吉、蜂須賀小六をはじめとする著名な戦国武将が初めて出会うのはこの屋敷であるし、信長らが墨俣攻略、桶狭間合戦といった著名な合戦の策を練るのもこの屋敷である。また、信長はこの屋敷で生駒家宗の娘、「吉乃」と出会い、織田信忠、信雄、徳姫（見星院）はこの屋敷で産まれた。このように、さまざまなことが生駒屋敷を中心に展開するさまを、藤本正行は、「生駒屋敷は世

第1表 前野文書と生駒屋敷関係年表

|         |  |
|---------|--|
| 1959年9月 | 伊勢湾台風、吉田家土蔵から前野文書発見？   |
| 1973年   | 瀧 喜義氏、前野文書の存在を知る   |
| 1975年1月 | 「生駒氏の邸址」碑建立（江南市による）  |
| 1977年   | 『江南郷土史研究会会報』創刊、初期から生駒屋敷が前野文書との関連で紹介（瀧「小折生駒家の成因を探る」江南郷土史研究会会報10、1977など） |
| 1980年1月 | NHK「歴史への招待」で前野文書に依拠した墨俣築城の紹介   |
| 1984年   | この頃から市勢要覧、市の観光パンフレットにおいて生駒屋敷や久昌寺が観光や文化財の文脈で言及されるようになる                  |
| 1987年2月 | 『武功夜話』刊行   |
| 1991年7月 | 江南郷土史研究会による生駒屋敷調査  |
| 1992年1月 | 現地解説板設置（第3図）<br>NHK大河ドラマ「信長」放映開始（『武功夜話』に基づく生駒屋敷の描写）                    |
| 1995年1月 | NHK大河ドラマ「秀吉」放映開始（同上）   |
| 1996年   | 「第4次江南市総合計画」に「『武功夜話』によるふるさとづくり」  |

界の中心」<sup>(32)</sup>と揶揄している。

『武功夜話』の紹介によって、従来ほとんど知られていなかった生駒屋敷や久昌寺が、行政によって観光や文化財の文脈で言及されるようになった（第1表）。市勢要覧をみると、1979年までは生駒屋敷、久昌寺などへの言及は、地図上の記載も含めて一切なかったのが<sup>(33)</sup>、その次に発行された1984年のものから記述がみられ始め<sup>(34)</sup>、『武功夜話』に関連した内容が数ページに渡って記述されるようになる<sup>(35)</sup>。「第4次江南市総合計画」（1996年策定）には、「『武功夜話』によるふるさとづくり」が「マイタウン江南2005プロジェクト」の施策として掲げられるに至っている<sup>(36)</sup>。

#### (2) 「吉乃御殿」の創出

江南市案の最大の問題と考えられるのが「吉乃御殿」の記載とその位置である。そしてそれは『武功夜話』など前野文書の記述を重視することによって生じたと考えられる。上述したように「吉乃」は生駒家宗の女子の『武功夜話』における呼称であるが、良質な史料からは家宗の女子が信長側室となり、（おそらくは清洲城で）信雄を産んだことしか確認できない。以下では、「吉乃御殿」をめぐる江南市案の問題を3点に分けて指摘し、検討を加えたい。

まず1点目に、上述したことで矛盾するようであるが、「吉乃御殿」という名称は『武功夜話』にもみら

れない、創作であることがあげられる。生駒家の屋敷は『武功夜話』には一貫して「生駒屋敷」ないしは「雲球屋敷」という名称で登場し、「吉乃」が別に屋敷を構えたという記載はみられない。にもかかわらず、その屋敷が「吉乃御殿」と呼ばれているのである<sup>(37)</sup>。その理由として、一つには、「吉乃」の存在がこの屋敷にとって極めて大きな意味を持つものとみなされていることが考えられる。「吉乃」がいたからこそ、信長がここに足繁く通い、さまざまな事件がここで展開することになるからである。ただし、「吉乃御殿」と呼ぶ最大の理由は、後述するが、ここを「吉乃」関連の場所として限定して提示しようとするところに求めるべきであると考えられる。

なお、『武功夜話』には、「吉乃」が織田信忠、信雄を出産したのは生駒屋敷ではなく近隣の井上屋敷（岩倉市）であるという異説も含まれている。瀧は、1982年の時点ではこの異説にも言及していた<sup>(38)</sup>。しかしその後、瀧を含め江南市においてこの異説はまったく語られなくなっていることも、生駒屋敷像の創出として興味深いといえる。

2点目に、「吉乃御殿」と生駒屋敷を別のものとし



第3図 生駒屋敷絵図の解説図

現地に建てられた解説板（江南市教育委員会、1992年）。現在の地図上に生駒屋敷曲輪群を示した図（省略、屋敷曲輪群の外郭線は第2図に示した）とセットになっている。

て提示していることがあげられる。上でみたように、「吉乃御殿」は生駒屋敷そのものであるはずで、瀧による記述も大半はそうになっている。しかし、絵図を解説する箇所では、『武功夜話』に従い、信雄の改修の前後を通して生駒屋敷が同じ位置（絵図中の「御家」）にあったことを前提に記述される一方で<sup>(39)</sup>、それとは別の位置に「吉乃御殿」があったように解説されている。すなわち、江南市案では、戦国期の生駒屋敷が「御家」と「吉乃御殿」の2つに分裂しているのである。

これは生駒屋敷絵図をベースマップとして記述したことに起因する誤りであるといえる。しかし、それだけではなく、江南市案では「吉乃御殿」は「御家」ではない場所に置かれる必要があったと考えられる。

それには、3点目の問題、「吉乃御殿」が十分な説明もなく龍神社（旧、八龍宮）前（第2図のE）に置かれていることを検討しなければならない。瀧は龍神社前に「吉乃御殿」を置く理由を「伝承地である」の一言で片付けているが、そうした伝承の存在は他では確認できず、おそらくは、織田信雄の生誕地に関する記述や伝承を指しているものと思われる。

信雄の生誕地については、近世以来さまざまに言及されている。すなわち、尾張藩の代表的な地誌である『張州府志』（1752年完成）が「信雄は小折城中に生まる。今その地を名づけて西の丸といふ」と記述し<sup>(40)</sup>、それは近代の地誌にも引き継がれている。一方、生駒家に伝えられた文書では、「信雄公ハ小折村二之丸ニて誕生也、今之ハ八龍宮氏神之由也」となっている<sup>(41)</sup>。なお、龍神社の所在地は、（旧）字名では「西ノ丸」になる。

江南市案では、龍神社向かいの同社付属地までを生駒屋敷の曲輪に入れ、そこを、織田信雄生誕地である「吉乃御殿」として示している。そのことによって、「吉乃御殿」を信雄生誕地伝承と整合させつつ（つまり、西の丸あるいは龍神社）、生駒屋敷曲輪内（西の丸あるいは二ノ丸）に置くことが可能になっている。江南市案に基づけば、「西の丸」・「二ノ丸」は戦国・近世を通して変化していない生駒屋敷曲輪の名称としても解釈されるから、「吉乃御殿」が曲輪内であることは大きな意味を持つ。それと信雄生誕地伝承との整合が図られる地点は龍神社向かい、第2図のE以外にはない。さらにいえば、「吉乃御殿」について「現在はその一角が八龍社社務所となり、邸内には「雨壺池」がある」ことが指摘され、その池について「八大竜王が恵みの雨を降したといふ伝承」と結びついていることが説明される<sup>(42)</sup>。ここが聖性を帯びた場所である



といたいようであり、そのこともここに「吉乃御殿」を比定した理由なのかもしれない。

「吉乃御殿」のこの場所への比定に関連して指摘しておきたいのが、江南市案における「埴原屋敷」の位置である。埴原常安<sup>はいばら</sup>は信長の家臣で、のち尾張藩に属し、小折村に住んだ。近世地誌には具体的な屋敷の位置に関する記述はないが、近代の地誌は常安が龍神社前に屋敷を構えたとしている<sup>(43)</sup>。つまり、江南市案における「吉乃御殿」の位置である。一方、江南市案では「埴原屋敷」を生駒屋敷曲輪の北西端の部分としているが(第3図)、「常安は田代柿ノ木畑の生駒与左衛門屋敷で老衰相果つと生駒文書にある」<sup>(44)</sup>というその説明には疑義を抱かざるをえない。「吉乃御殿」と場所が競合する「埴原屋敷」をあえて移動させたというべきであろう。すなわち、江南市案では、龍神社前に「吉乃御殿」を置くことが「埴原屋敷」の比定にも影響していると考えられる。

### (3) 過去の単純化と整序

このように、江南市案の生駒屋敷復原には問題が多く、恣意的で内部に矛盾を含んだヘリティジ景観の提示が行われているといわざるをえない。上で検討した3つの問題点を整理してみると、「吉乃御殿」＝戦国期生駒屋敷と「御家」＝近世生駒屋敷・「埴原屋敷」とは年代が異なり、また、戦国期生駒屋敷と近世生駒屋敷は位置が異なり、戦国期生駒屋敷と「埴原屋敷」は位置が重なる可能性がある。江南市案ではそれらにある程度気付きながら、また、部分的にはそれらを反映しつつも、結局は3つを並行するものとして提示している。

これは単純化された過去表象としてとらえられよう。なぜ単純かという点、結果として1地点に1つの過去事象が割り振られているからである。「御家」には生駒家の屋敷が、「吉乃御殿」には信長と「吉乃」の逢瀬が、それぞれ表象すべき内容として割り振られ、「吉乃御殿」＝戦国期生駒屋敷は2か所に分立することになった。「吉乃御殿」と「埴原屋敷」は年代が異なるから、同じ場所にあっても問題ではないはずだが、別の地点とされた。

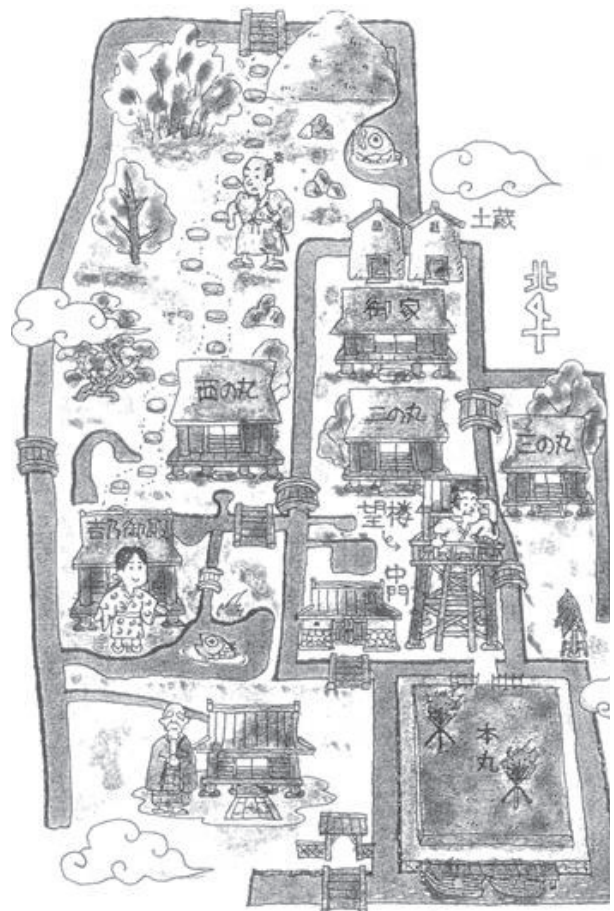
そのような単純化の上に、さまざまな過去の事象—ここでは「吉乃御殿」、「御家」、「埴原屋敷」—が、一つの平面上に整序されて展開している。第3図の復原もそうだが、江南市案の戦略をより如実に表しているといえるのが、第4図に示した復原イラストである。この図には「埴原屋敷」はないものの、「吉乃

御殿」、(小牧・長久手の戦いで)臨戦態勢の「御家」、(1650年頃に伽藍が整備された)久昌寺などが描きこまれ、生駒屋敷に関して提示に値すると考えられた過去が、時代は関係なく、一望の下に示されている。このような、単純化され、整序されたヘリティジの景観は、博物館、あるいはより正確にはテーマパークと似たものといえるだろう。

## IV おわりに

本稿では、生駒屋敷というヘリティジを事例に、IIで絵図を用いた景観復原的考察、IIIで復原に関する定説である江南市案の背後にある歴史意識の考察を行った。

IIでは地籍図や村絵図との整合を重視し、また現地調査の成果も含めて、新たな復原案を提示した。定説の地位にある江南市案を中心に従来の復原案を批判的に検討し、それらの復原の誤りを具体的に指摘した。従来の復原案の中で松浦案は本稿の復原案に近い



第4図 生駒屋敷復原イラスト

出所：江南市教育委員会『戦国武将たちの青春の舞台 江南』（パンフレット）江南市教育委員会、発行年不明。

ただし、1999年作製の市勢要覧にも同じ図が載っており、同時期と推定される。

ものである。

次いでⅢでは、江南市案の復原における過去事象の細かな読み込みを検討した。純粋な景観復原研究を志向する場合、江南市案に拘泥する必要は何もないが、本稿では、復原に関する言説そのものを解釈することで、どのような歴史意識が読み取れるかに着目した。『武功夜話』からは、「吉乃」重視の姿勢や生駒屋敷の全体像について影響がみられる。その上に、旧来からの伝承に基づく「吉乃御殿」の位置が加味されることによって、生駒屋敷曲輪群の範囲が設定された可能性を指摘できる。さらに、生駒屋敷像の提示は、過去の単純化と整序という戦略が加わったものとしてとらえることができる。このように、生駒屋敷を事例とした本稿では、ヘリテージ景観の復原に対して、歴史意識がいくつかのレベルで影響していると解釈できることを示した。

最後に、生駒屋敷の景観復原に限って、残された課題を示しておきたい。下村<sup>(45)</sup>は字「西の丸」（龍神社の南西）に曲輪をみいだしており、織田信雄が西の丸で出生したという伝承があることを考えると、これを戦国期生駒屋敷の一部とみてよいのか、その場合、主郭はどこなのか、検討が待たれる。それに関して、Ⅱ-(2)で高田案を検討した際にも触れたが、生駒屋敷曲輪群の南には近世生駒屋敷に含まれない方形の曲輪（第2図のD）があることを本稿では示した。この曲輪の成立次期や役割をどう解釈するかが大きな課題であるといえよう。

## 註

- (1) アダム, B. (伊藤 誓・磯山甚一訳) 『時間と社会理論』法政大学出版局, 1997, 66頁。
- (2) Nash, C., 'Historical Geographies of Modernity' (Graham, B. and Nash, C. eds., *Modern Historical Geographies*, Prentice Hall, 2000.), p.27 (ナッシュ, K. (山村亜希訳)「モダニティの歴史地理」(グレアム, B.・ナッシュ, K.編 (米家泰作・山村亜希・上杉和央訳)『モダニティの歴史地理 上巻』古今書院, 2005) 35頁。)
- (3) ホブズボウム, E. (前川啓治訳)「序論—伝統は創り出される」(ホブズボウム, E.・レンジャー, T. 編 (前川啓治訳)『創られた伝統』紀伊国屋書店, 1992) 9-28頁。
- (4) フランスの歴史家, ノラ, P. によって, 集会的記憶の場の分析を通してフランスの国民意識のあり方を探ることを目的に, 120名の歴史学者を動員して行われた出版プロジェクト (1984-92年)。
- (5) 例えば次の研究をあげておく。(1)羽賀祥二「美濃に

- おける古代伝説と遺蹟—泳宮と喪山について—」(羽賀祥二『史蹟論—19世紀日本の地域社会と歴史意識—』名古屋大学出版会, 1998) 260-296頁。(2)高木博志「近代における神話的古代の創造—畷傍山・神武陵・樞原神宮, 三位一体の神武「聖蹟」」(鈴木 良・高木博志編『文化財と近代日本』山川出版社, 2002) 111-142頁。(3)Brace, C., 'Looking back: the Cotswalds and English national identity, c. 1890-1950', *Journal of Historical Geography*, 25, 1999, pp.502-516。(4)Jacobs, J. M., 'Negotiation the heart: heritage, development and identity in postimperial London.' *Environment and Planning D: Society and Space*, 21, 2003, pp.751-772。
- (6) 福田珠己「赤瓦は何を語るか—沖縄県八重山諸島竹富島における町並み保存運動—」地理学評論69A-9, 1996, 727-743頁。
- (7) 森 正人「場所の真正性と神聖性—高知県室戸市の御厨人窟を事例に—」地理科学56-4, 2001, 252-271頁。
- (8) 矢野敬一「戦国武将の顕彰と祭礼の誕生—名勝の発見とメディア・イベント」(矢野敬一『慰霊・追悼・顕彰の近代』吉川弘文館, 2006) 180-209頁。
- (9) Johnson, N., 'Where geography meets history: heritage tourism and the big house in Ireland', *Annals of the Association of American Geographers*, 86, 1996, pp.551-566。
- (10) MacCabe, S., 'Contesting home: tourism, memory, and identity in Sackville, New Brunswick', *Canadian Geographer*, 42, 1998, pp.231-245。
- (11) なお以下の拙稿もこうした研究を志向したものである。(1)大平晃久「対立する記憶と場所—小港町・香川県汐木をめぐる歴史意識—」歴史地理学46-5, 2004, 25-39頁。(2)同「創出されたヘリテージ—岐阜県可児市明智城跡を事例に—」東海女子大学紀要25, 2006, 55-63頁。
- (12) 高田 徹「三河・美濃国の尾張藩家臣在所屋敷」愛城研報告9, 2005, 73-104頁。
- (13) 下村信博「生駒屋敷」(愛知県教育委員会編『愛知県中世城館跡調査報告Ⅰ』愛知県教育委員会, 1991) 57-59頁。
- (14) ただし, 小折村小折の在郷町としての性格は, 近世の中ごろから同じ村内の布袋が在郷町として成長するにつれ, 弱まったものと考えられる。
- (15) 在所屋敷は一般的には陣屋と呼ぶものである。中島義一「陣屋」(藤岡謙二郎・山崎謹哉・足利健亮編『日本歴史地理用語辞典』柏書房, 1981, 300-301頁。
- (16) 前掲(13)。この根拠として縄張や近世地誌『張州府志』の記述「(信雄は)その後小折城を修復し, 内に高樓を建て, 外障塹を浚う(原文は漢文)」がある。名古屋史談会編『張州府志』愛知県郷土資料刊行会, 1974, 423頁。
- (17) 江南市教育委員会編『江南市史 近世村絵図編』江南市,

- 1994。
- (18) 江南市教育委員会編『江南市史 資料4 文化編』江南市、1983、82頁。
- (19) 前掲(13) 57頁。
- (20) 江南市教育委員会編『江南市史 近世村絵図編 解説書』江南市、1994、160頁。
- (21) 『江南市史 近世村絵図編』に収載された複製図は、この貼り紙をはがして撮影されたものである。
- (22) 方形の曲輪には朱は全く入れられておらず、特別な場所として維持されようとしたことを示す可能性もある。なお、「土蔵」のうち1棟、「御風呂場」の西端と東端の部分、「御家」の横に朱色で○印が付けられているが、これが何を意味しているかは不明である。記載が行なわれた当時、残存していた建物を示すものかもしれない。
- (23) また、絵図に描かれた門のどれも、生駒屋敷中門を移築したものと伝えられる広間家の門(現存)と似ていない。このことも、絵図の作成がある程度古いことを示す可能性がある。
- (24) 徳川林政史研究所蔵の小折村絵図は2点あり、1点が天保12(1841)年作成で『江南市史 資料2 文献編』に掲載のもの、もう1点が作成時期不明で前掲(17)に収載されたものである。江南市史編纂委員会編『江南市史 資料2 文献編』江南市、1977、331頁。
- (25) この報告は「江南郷土史研究会」名義で執筆されているが、後述の瀧の文献にほぼそのまま収載されるなど、実質的には瀧個人の論文とみるべきものである。なお、瀧による次の文献に掲げられた復原にはこれと細部に違いがある。(1)瀧 喜義「愛人・吉乃の生家、生駒屋敷」(瀧 喜義『「武功夜話」のすべて』新人物往来社、1992) 37-47頁。(2)瀧 喜義・舟橋武志「小折とその周辺を歩く」(瀧 喜義・舟橋武志『探訪武功夜話のふるさと』ブックショップマイタウン、1992) 86-135頁。
- (26) 江南郷土史研究会(瀧 喜義)「生駒屋敷絵図」江南郷土史研究会会報151、1991、4頁。第1図中で江南市案が生駒利勝墓所とみなしたのはBで、これがやや西方に移転したと指摘されていることになる。ただしBは、正しくは久昌寺鎮守弁財天社と思われ、また製糸工場のあった位置ではない。なお、第1図中のCが生駒利勝墓所であるが、これを江南市案では源太夫社(現存せず)と比定している。
- (27) 前掲(26)4-5頁。
- (28) 一般的な地籍図であり、「旧土地整理図」という表題で綴じられている。なお、作製者として土田喜三郎氏のほか政木総七、暮石宇兵衛、宮崎甚一郎の各氏の名前があげられている。
- (29) 「引用した絵図は、昭和12年に刊行された小折村土地宝典に転写されたものを利用した」とあり、江南郷土史研究会(瀧)は原図をみていない可能性がある。前掲(26)4-5頁。
- (30) 江南市案においては、第3図に示されるように、「望楼」・「竹橋」・「大手門」など、「生駒屋敷絵図」(第1図)から読み取れないものが、あたかも絵図中にあるように提示されている。ただし、それは「生駒屋敷絵図」をベースマップとして記述したり、提示したりする手法のレベルの問題である。
- (31) 吉田蒼生雄編『武功夜話 第一巻』新人物往来社、1987、40-41頁。なお、この描写が第1図の「生駒屋敷絵図」によく合致することは、『武功夜話』の真偽を考える上で興味深い。また屋敷曲輪群そのものは信長時代から近世にそのまま受け継がれたように読める書き方をしている。
- (32) 藤本正行・鈴木真哉『偽書『武功夜話』の研究』洋泉社、2002、24頁。
- (33) 江南市『市制25周年記念 こうなん'79市勢要覧』江南市、1979。
- (34) 江南市『市制30周年記念 こうなん'84市勢要覧』江南市、1984、59・71頁。
- (35) 江南市『KONAN 江南市制40周年記念市勢要覧』江南市、1994以降、5年ごとに刊行される市勢要覧が該当する。なお、観光関係のパフレットはあまり資料を得られていないが、管見の限り、1984年の市勢要覧と同じイラストマップの載った次のパフレットで生駒屋敷跡などが紹介されているのが最も早い例。江南市『KONAN こうなん』江南市、発行年不明。
- (36) 江南市『第4次江南市総合計画』江南市、1996、34頁。
- (37) 復原図では一貫して「吉乃御殿」という表記である一方、例えば次の文中では「生駒屋敷」・「吉乃御殿」・「生駒御殿」という表現が混在している。瀧 喜義「愛人・吉乃の生家、生駒屋敷」(瀧 喜義『「武功夜話」のすべて』新人物往来社、1992) 37-47頁。
- (38) 瀧 喜義「井上城と久庵桂昌尼(江南史料散歩60)」こうなん農協だより81、1982、3頁。
- (39) 前掲(26)2-4頁など。
- (40) 前掲(16)。
- (41) 松浦 武・生駒陸彦編「生駒宗直物語」(松浦 武・生駒陸彦編『生駒家戦国史料集 尾張時代の織田信長・信雄父子を支えた一家』1993) 29頁。
- (42) 前掲(26)4頁。
- (43) 社本は「久昌寺西一町ノ地」、村瀬は「久昌寺より西へ半町の地にして、八龍の龍神社前」としており、同じ位置を示しているとみてよい。(1)社本利徳『愛知県丹羽郡布袋町誌』社本利徳、1925、54頁。(2)村瀬鼎五郎『町史布袋町大観』町史布袋町大観発行所、1934、40頁。
- (44) 前掲(26)4頁。生駒文書のうち活字化された部分では、埴原常安について「生駒撰津守子与左衛門居申候屋敷田代といふ所二在住也」と説明するのみである。前掲(41)18頁。なお、近世の田代組の領域は龍神社の南方で、近代記の地誌、江南市案ともに合致しないようである。
- (45) 前掲(13)。